
Fate/phantom night

冬原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / p h a n t o m n i g h t

【Nコード】

N 3 0 9 8 I

【作者名】

冬原

【あらすじ】

美尾月高校に通う二年生、神城美咲。

彼女はそれなりに充実している学校生活を送っていた。だが、とあるきっかけが原因で冬木市に行く事になる。

美咲「いつつ……ここであたしに何をしろってゆーのよ?。」

声「もうすぐこの地で第五次聖杯戦争が始まるんだ。
お前が勝つことが出来たら元の世界に戻してやる♪
ちなみに魔術刻印は私がいれておいた。
それでは、期待しているぞ♪」

美咲「……聖杯戦争？
もしかして……あのセイバーとかアーチャーとか出てくる、アレのこと？」

……訳が分からないが、元の世界に戻りたかったら聖杯戦争に勝たないといけないらしい。

美咲（……こんなんだったら、あんな場所に行かなければ良かったわね）

こうして、一人のイレギュラーを交えた第五次聖杯戦争が幕を開ける。

※若干性格違うかと思いますが、うる覚えなので大目に見てくれるとありがたいです（汗）

なんであたしが……（前書き）

美咲「……ねえ、なんでこんな事になったのよ？」

ランサー「俺が知るかよ。

てめえの胸にでも聞いてみやがれ。」

美咲「ありえないわ……

魔術とか、願いが叶う聖杯とか現実にあるわけないのに……」

ランサー「で、軽い説明とかしなくていいのか嬢ちゃん。」

美咲「わかったわよ……

この小説の主人公は、不本意ながらあたしみたいなの。

それと、作者が何故か『マスターとサーヴァントの組合せをかえよーぜ』とか言い出しちゃったから、マスターとサーヴァントの組合せが違うけど文句はなしよ。

そういうのが嫌なら、今から戻ることをオススメするわ。」

ランサー「良くできました、と。

じゃあさっさと始めよーぜ。

説明役なんて暇でしょうがねえし。」

美咲「わかったわよ……はあ……響介たち何やってんのかなあ……」

なんであたしが……

——ここは冬木市のとある公園。

時刻は既に夜の2時をまわっている。

そこに、一つの光が現れて……中から人が落ちてきた。

美咲「いつつ……ここであたしに何をしろってゆーのよ？」

声「もうすぐこの地で第五次聖杯戦争が始まるんだ。

お前が勝つことが出来たら元の世界に戻してやる♪

ちなみに魔術刻印は私がいれておいた。

それでは、期待しているぞ♪」

美咲「……聖杯戦争？」

もしかして……あのセイバーとかアーチャーとか出てくる、アレのこと？」

美咲はあたりを見る。

ここは確か……そう、F a t eの大火災があった場所ね。

美咲（つつ……）

右肩に違和感を感じる。

そこには。魔術刻印らしきものがあつた。

美咲「……やってくれたわね、あのガキ」

あーもー、イライラする!!!!

こんな事したら下手したら死ぬかもしれないじゃない

美咲「死んだら絶対にあのガキ、呪い殺してやるわ……」

とりあえず、本音を呟く。

けど当然なんにも起こらない。

美咲（確かこの公園は新都の方だから……コンビニぐらいあるわよね。）

とりあえずは情報が欲しい。

あたしの記憶に間違いがなければ、第五次聖杯戦争は2月2日開始だったはず……

せめて、今日が何日か位は知っておかないと。

そう考えて、あたしは少し歩いたところにあるコンビニの中に入る。

店員「ありがとうございましたー♪」

美咲「聖杯戦争まで、後一週間か……」

コンビニに行き、飲み物とホッカイロと冬木市の地図を買い店員に日付を聞いた。

今日は1月26日。

正確にはセイバーが召喚されるまでの時間が一週間。

時刻は深夜2時。

持ち物は、護身用スタンガンにメタルフリストに、さっき買った地図とホットコーヒーにホッカイロ、それと財布の中に諭吉が2人。

美咲「ビジネスホテルで三週間は過ごせないし……ってか、寒いわね。」

とりあえずホッカイロで凌ぐけど……あたし、さっきまで秋の中頃だった気がしたんだけど。

はあ……こんなんじや、参加する前に凍死しちゃうじゃない。

美咲（寝床を確保しないと……だとしたら、やっぱりあの女たらしの家しかないのかしら……）

ま、あの優しさのせいで女性が集まるんだろうけど……あたしもその中の一人なのかなあ。

あたしはこの真冬の夜遅く、衛宮邸を目指して歩いていた。

美咲「……寒い。」

どうにかならないかしら……

と、そんな事を考えていたら右肩にある（あのガキが勝手に入れた）魔術刻印が疼いた。

美咲「魔術刻印ってことは……あたしもしかして魔術、使えるのかしら？」

おそらくあのガキは、聖杯戦争にマスターとして参加して勝利しろと言いたかったはず。

だからあたしに魔術刻印を入れた。

ならあたしが魔術を使えるなければ、そもそも話自体が成り立たないわよねえ……

美咲（確か、衛宮士郎はイメージをして回路がどうか言って自分だけの呪文を唱えていたわね……）

なら、あたしにも同じ事が出来るはず……

美咲（トレース・オン。

じゃなくて……あたしだけの呪文……）

ぶっちゃけ、意味を成してればこんなの何でもいいんじゃない？

あたしだけの呪文とか無視しちゃってもさ。

とりあえず暖まりたいから……

美咲「メイク・ファイアウォール。」

……あ、なんか寒くない♪

……それとカッコ悪いとか言わないでくれる？

あたし、ワケのわからない呪文やイタリア語とかフランス語とかド

イツ語とか全然知らないし。

美咲「でもやっぱりカッコ悪いわよねえ……」

後であたしだけの呪文考えておこうかな……
冬木市に飛ばされてから一時間後。
とりあえず、目的の場所につく。

美咲（一回迷った時は焦ったけど、案外なんとかなるものね♪）

さて……ついたはいいけど、とりあえずどうしましょうか？
とりあえずさっきのファイアウォールでなんとか寒さは凌げたもの
の……

美咲「勝手にあがるわけには……流石にまずいわよねえ……」

時間も時間なわけだし。
でも三時間待つのはやっぱり暇よ……
……あ……！

美咲「だったら、今の内にサーヴァントでも呼んでおけばいいじゃない……！！！」

そう、暇ならば今のうちにサーヴァントを呼んでおけばいいだけのこと。

でも……

美咲（呼ぶのって、なんか道具が必要なのよね……）

手元にあるものは、メタルフィストにスタンガン、飲み終わったホットコーヒーの缶にホッカイロ、それと冬木市の地図に……

美咲「サイフと……赤い槍のストラップ」

うわぁ……あたし、こんなのつけた記憶ないんだけど。

何でこんな意味分かんないストラップが……

美咲「けど、召喚用の道具として使えそうよね♪」

あとは魔法陣だっけ……

あたしは、手に持っている荷物を適当に六角形っぽくなるように置く。

そして、ホットコーヒーの空き缶を触りながら六角形と円を想像しながら

美咲「メイク・ユニオン。」

……うん、魔法陣はこれでいいかな。

それじゃ次は召喚だけど、とりあえずこのミニゲイボルグを真ん中に置いて……

美咲（確か……始めに凜、こんなこと言ってたわよね……）

美咲「告げる――」

汝の身は我が下に

我が運命は汝の剣に

聖なる杯の寄る辺に従い

この意 この理に従うのならば応えよ

誓いを此処に

我は常世総ての善と成る者

我は常世総ての悪を敷く者

汝

三大主言霊を纏う者
抑止の輪より来たれ
天秤の守り手よ——！！」

呪文を言い終える。
だが、何も起こらない。

美咲「あつれー？
もしかして間違ってたのかなあ？」

でも、変化はあった。
それは赤い槍のストラップが消滅したこと。
つまり、何かは起きている。

美咲「てゆうか、なんであたしがこんな事を……」

そう言いながら、あたしは衛宮邸の扉の前に座り込む。
今日は疲れたし……とりあえずここで休みましょう……

美咲（ファイアウォールも効いてるし、多分平気よね……）

そう言ってあたしは眠りにつこうとする。

声「おい、嬢ちゃん。
てめえ、こんな所で寝ると死ぬぞ。」

美咲「……ふえ？」

声が聞こえて目が覚める。

そうすると目の前には、赤い槍を携えた青髪の男性が立っていた。

美咲「あんた……ランサー？」

ランサー「ああ、そうだ。

真名はクー・フリーン。

マスターの呼びかけに応じて推参した。」

左腕をみると、そこには先ほどの魔術刻印とは違う紋章が現れている。

美咲「じゃ、これが令呪なわけか……」

ぱっとみそれは下が炎で上が雷のマークのよう。
多分、三カ所に分かれているんでしょうね。

美咲「あたしの名前は神城美咲よ。
コレからよろしくね、ランサー。」

ランサー「ああ。

俺が嬢ちゃんを勝たせてやっから、安心しろ。」

こうして、神城美咲はランサーをサーヴァントとして第五次聖杯戦争に参加する。

美咲（てゆうか、あたしがランサー呼んだらダメットは何呼ぶのかしら？

これ、絶対stay nightの聖杯戦争と違う事になりそうね……）

1 組目

神城美咲×ランサー

なんであたしが……（後書き）

（後書き）

F a t e／N e w S n i g h t

綺礼「やあ読者の諸君、後書きと次回予告の司会進行を務める言峰^{ことみ}綺礼だ。^{ねきれい}

本編にも出演するので、これからよろしくお願いしよう。

そしてこちらが……」

美咲「アナウンサーAの神城美咲……」

士郎「アナウンサーBの衛宮士郎^{えみやしろう}だ。」

綺礼「おや、元気がないな神城アナ。」

美咲「誰のせいよ、誰の……」

士郎「とりあえず本題に入らないか？」

綺礼「ふむ……それもそうだな。

では記念すべきF a t e／N e w S n i g h t一回目は専門用語

に関してだ。

では神城アナ、後は頼んだぞ。」

そう言って、楽屋裏に行く神父。

美咲「ちよっとお!!!!!!

はぁ……仕方ないわね。

Fateの専門用語の意味は大体こんな感じよ。」

マスター……サーヴァントを使役する者。

サーヴァント……過去の神話等の英霊（英雄の魂）の事。

備考…サーヴァントのクラス
セイバー（剣使い）

アーチャー（弓使い）
ランサー（槍使い）
ライダー（乗り手）
キャスター（魔術師）
バーサーカー（狂戦士）
アサシン（暗殺者）

真名……サーヴァントの英雄時代の名前。
敵にバレると大変らしい。

令呪……強大な力を持つサーヴァントを操る呪印。
三度までどんな無理な命令をさせることが出来るが、三度命令すると契約が切れる。

聖杯戦争……聖杯を求めて、七人のマスターとサーヴァントが争う戦い。

聖杯……どんな願い事も叶う道具。

美咲「こんなものね。」

士郎「お疲れ神城。
じゃ次回予告は俺が……」

綺礼「私がやろう。
ちょうど腹ごしらえも終わったしな。」

美咲「……わがままな司会進行ねえ。」

綺礼「次回予告!!!!
ダメツトは誰をサーヴァントにするのか!?
そして他のマスターとサーヴァントはどのような繋がり!?
ちなみに、次回に美咲と士郎の出番はない。
私はあるがな。」

美咲「はあっ!?!」
士郎「ちよっ、言み」

綺礼「それでは、次回にお会いしよう。
フフ……今回の聖杯戦争は楽しくなりそうだな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3098i/>

Fate/phantom night

2010年10月10日16時25分発行